

生命表の概況

生命表は、死亡状況が作成基礎年次以後不変であると仮定し、一定期間におけるある人口集団についての死亡秩序を、死亡率、生存数、定常人口、平均余命等の関数で示したものである。

各関数の意味は次のとおりである。

死亡率 ($n q_x$) : ちょうど x 歳に達したものが $x + n$ 歳に達しないで死亡する確率を、 x 歳以上 $x + n$ 歳未満における死亡率といい $n q_x$ で表す。

生存数 (l_x) : 10万人の出生者が、上記の死亡率にしたがって死亡減少していくと考えた場合に、 x 歳まで生き残ると期待される者の数を x 歳における生存数という。

死亡数 ($n d_x$) : x 歳における生存数 l_x 人のうち、 $x + n$ 歳に達しないで死亡すると期待される者の数を x 歳以上 $x + n$ 歳未満における死亡数といい $n d_x$ で表す。

定常人口 : 毎年10万人の出生が年間を通じてまんべんなくあったとして、($n L_x$ 、 T_x) これらの者が上記の死亡率にしたがって死亡すると仮定すると、究極において一定の人口集団が得られる。この集団の x 歳以上 $x + n$ 歳未満の人口を x 歳から $x + n$ 歳における定常人口といい、 $n L_x$ で表す。また、 T_x は、 x 歳の生存数 l_x 人について、これらの各々が x 歳以降死亡に至るまでの生存数の和、または、上記の人口集団における x 歳以上の人口である。

平均余命 : x 歳の生存数 l_x について、これらの者の x 歳以降の生存年数の平均を平均余命といい、0 歳の平均余命を特に平均寿命と呼んでいる。

(1) 京都市の平均寿命

令和4年の京都市の平均寿命（0歳の平均余命）は男81.62歳、女87.99歳となっており、昨年と比べると男の平均寿命は0.90歳短くなり、女の平均寿命は0.62歳短くなっている。男女の平均寿命の格差は6.37歳で、昨年より0.28歳大きくなっている。

平均寿命の年次推移をみると、過去10年間に男で1.48歳、女で1.62歳長くなっており、過去20年間では男で2.64歳、女で1.46歳長くなっている（図1）。

(2) 特定年齢階級までの生存数

令和4年の京都市の簡易生命表では、65歳の年齢階級での生存数は男90,470人で女94,856人であるが、これは10万人出生したうちで、男で90.5%、女で94.9%が65歳の年齢階級まで生存することを示している。同様に男の64.5%、女の82.6%が80歳まで生存することとなっている。

年次推移では、40歳まで生存する者の割合と比べて、80歳まで生存する者の割合の伸びが大きく、昭和50年と比較してみると、男が約1.7倍、女が約1.5倍に増加、昭和40年では男で約2.6倍、女で約2.0倍に増加している（表1）。

図1 平均寿命の年次推移

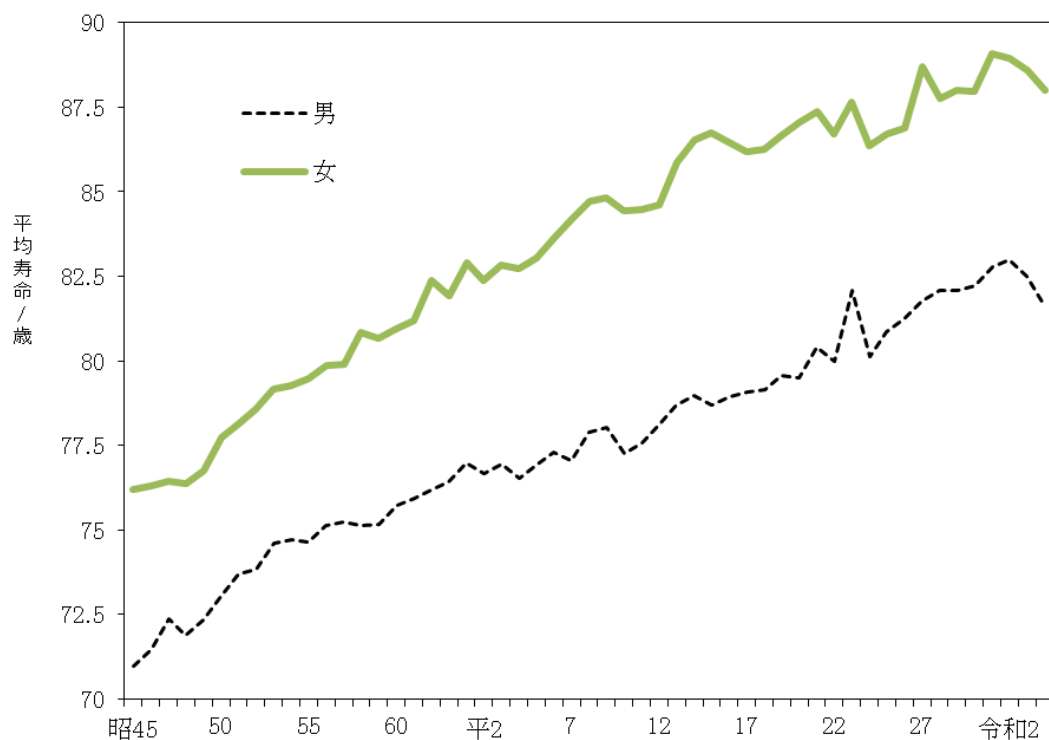


表1 特定年齢階級まで生存する者の割合

(%)

年齢階級	男			女		
	昭和40	昭和50	令和4	昭和40	昭和50	令和4
40歳	94.0	96.1	98.5	95.8	97.3	99.0
65	72.3	80.6	90.5	81.6	87.1	94.9
80	24.5	36.9	64.5	41.7	53.4	82.6